

佐久考古通信

発行：2020. 4.20 佐久考古学会
小諸市御影新田 1945-6 桜井秀雄方
今号の編集担当 小山岳夫
今号の編集協力 中尾弘喜 飛松武志

遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌：長野県佐久地域における考古遺跡・遺物からのアプローチ

特集 岩村田式土器南下の意味

学史退場から 50 年経つ弥生後期の岩村田式再評価が始まった。本特集では岩村田式土器が諏訪湖南部・山梨県、また、山梨県経由で太平洋岸にまで移動している現象を検証する。



岩村田式土器の標識資料（後期Ⅲ期新段階） 佐久市上直路遺跡第 1 号住居址出土土器 写真提供：佐久市教育委員会

本号では、弥生時代後期が始まった紀元 1 世紀に佐久盆地の弥生人が山梨県や諏訪湖南部の茅野市域へ移住したとする仮説の真偽を考える。弥生時代後期、中国では王莽による後漢王朝が始まった時期である。

この頃長野県千曲川流域ではベンガラで真っ赤に彩る壺・高坏と中部高地型櫛描文と言われる波形の文様で飾られる甕などに象徴される箱清水式土器（本号で筆者は「中央高地系土器」と総称する。）が流行していた。箱清水式は長野盆地では壺の文様は T 字状の櫛描文への統一が始まるのに対し、佐久盆地では壺を飾る文様としてナイフで切ったような鋭利な切り口の付いた矢羽状文が櫛描文とともに選択され、小山岳夫はこれらを学史や地域色を重視して岩村田式土器と呼び、小地域の型式名として独立させた。

岩村田式とみられる矢羽状文で飾られた壺が山梨県や茅野市域でみつかることに注目した小山は佐久・山梨・茅野の土器や遺構を比較し、土器は特定器種に限られず各器種がセットをなして共通すること、炉の構造、墓の形態なども共通することを指摘した。佐久盆地に起源をもつ土器敷炉が山梨・茅野でもみつかる事実は、生活様式全体が移動者に随伴した有力な証拠になると考えた小山は、紀元 1 世紀頃に佐久盆地から山梨・茅野への集団移住があったことを主張している。また、山梨県に移動した岩村田式は、東海系や長野県の南信系土器と混在・融合して金の尾式土器となり、主に甕が静岡や神奈川県など太平洋沿岸で出土する現象にも解釈を加えている。

本号では佐久からの移住先とみる山梨・茅野の状況については稲垣自由氏・小池岳史氏、山梨から静岡・神奈川については篠原和大氏・大島慎一氏に執筆依頼してその謎と小山仮説の真偽を検証した。

★ CONTENTS

- 岩村田式土器と金の尾式土器 …………… 稲垣自由・2
- 「家下・金の尾式型」と「岩村田式」 …………… 小池岳史・6
- 登呂式土器と中部高地系土器の影響 …………… 篠原和大・8
- 神奈川県西部 足柄平野の中部高地系櫛描文土器 …… 大島慎一・12
- 岩村田式・金の尾式南下の意味 …………… 小山岳夫・14

岩村田式土器と金の尾式土器

稲垣 自由

本論は、岩村田式土器の南下について検討するため、岩村田式土器と甲府盆地の中部高地系土器である金の尾式土器との比較を行いながら、両者の関係について探ることを目的とする。

また、小山岳夫が推定する集団の移住について、甲府盆地内での遺跡分布とその特徴を提示し、今後の議論進展のための材料としたい。

岩村田式土器と金の尾式土器

岩村田式土器は小山岳夫が再提唱した土器「型式」である（小山 2020）。これまで佐久系箱清水式土器として呼称されていた土器群であり、箱清水式土器との違いを器形や器種構成の差異ではなく、施文される文様の細かな差異を指標として設定された土器である。

岩村田式土器は、後期前葉から古墳時代初頭にかけて存在する、頸部に鋭利な金属のような工具によって施文されたヘラ描文を有する壺と、後期中葉から古墳時代にかけて存在する、櫛描横羽状文を胴部に施文した甕の存在をその特徴とする（小山 2020）。

一方、金の尾式土器は中山誠二が提唱した土器「様式」であり、中部高地系土器と東海系土器が混在した甲府盆地の土器様相を示す様式として設定されている（中山 1999）。筆者は中山の設定した金の尾式土器について、1999 年以降に蓄積された資料を追加して分析対象とし、金の尾式土器を構成する土器の提示と時期細分を行った（稲垣 2015）。結果、甲府盆地の弥生時代後期を、Ⅰ期からⅣ期の4時期に細分した。そして、Ⅲ期から確認される東海系土器と、東海系土器が主体的に出土する遺跡の形成を甲府盆地における弥生時代後期の転換点として見出した。また、個別器種、特に甕の器形について、箱清水式土器と比較し、箱清水式土器ほど明確に頸部の形態変化が確認できないという点も指摘した（稲垣 2014）。

岩村田式土器と金の尾式土器は、型式と様式という異なる基準で設定されている。このため、両者を

比較する場合、岩村田式土器は金の尾式土器に含まれる中部高地系土器と比較することが適切である。

こうしたことから、以下では金の尾式土器の中部高地系土器について、その特徴と時期的変化を提示し、岩村田式土器との比較を行う。

金の尾式土器の中部高地系土器

金の尾式土器には、後期前半の金の尾Ⅰ式と後期後半の金の尾Ⅱ式がある（中山 1999）。筆者の設定した後期の細分に照らすと、金の尾Ⅰ式はⅠ～Ⅱ期、金の尾Ⅱ式はⅢ～Ⅳ期に該当し、金の尾Ⅰ式Ⅰ段階はⅠ期古段階、Ⅱ段階はⅠ期新段階、Ⅲ段階はⅡ期、金の尾Ⅱ式Ⅰ段階はⅢ期、Ⅱ段階はⅣ期にそれぞれ該当する。Ⅰ式とⅡ式の大きな違いは、土器組成における東海系土器の割合であり、明確な数値は示されていないが、Ⅰ式よりもⅡ式のほうが東海系土器とセットとなる割合が高いという特徴がある。

金の尾式土器の中部高地系土器について確認すると、金の尾Ⅰ式の壺にはヘラ描による矢羽根状文をもつものがあり（音羽B区4号土坑）、甕には口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描廉状文、肩部に櫛描波状文、胴部にバリエーション豊富な櫛描文（縦羽状、斜状、鋸歯状区画に波状文充填など）が施されるものが一般的である（塚本 26 号竪穴）。この甕の胴部文様は、Ⅰ式Ⅲ段階になると施されなくなり、その上部にあった文様帯の肩部文様が胴部付近まで下って施されるように変化する。

金の尾Ⅱ式は、櫛描Ⅰ字文の施される壺のほか、壺の頸部に櫛描文を施しながら、口縁端部を折返す、中部高地系土器と東海系土器が折衷したもの（金の尾2号住居址など）の確認例が増加する。甕は、口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描廉状文、肩部に櫛描波状文を施すものが一般的となり、肩部の文様帯が縮小していく傾向がある（金の尾20号住居址など）。また櫛描文が施文されず、ハケ調整で仕上げとするハケ調整平底甕（小池 2001）も増加する。

こうした変化の特徴から、金の尾Ⅱ式（Ⅲ期）以降の中部高地系土器は、これまで類似性の高かった

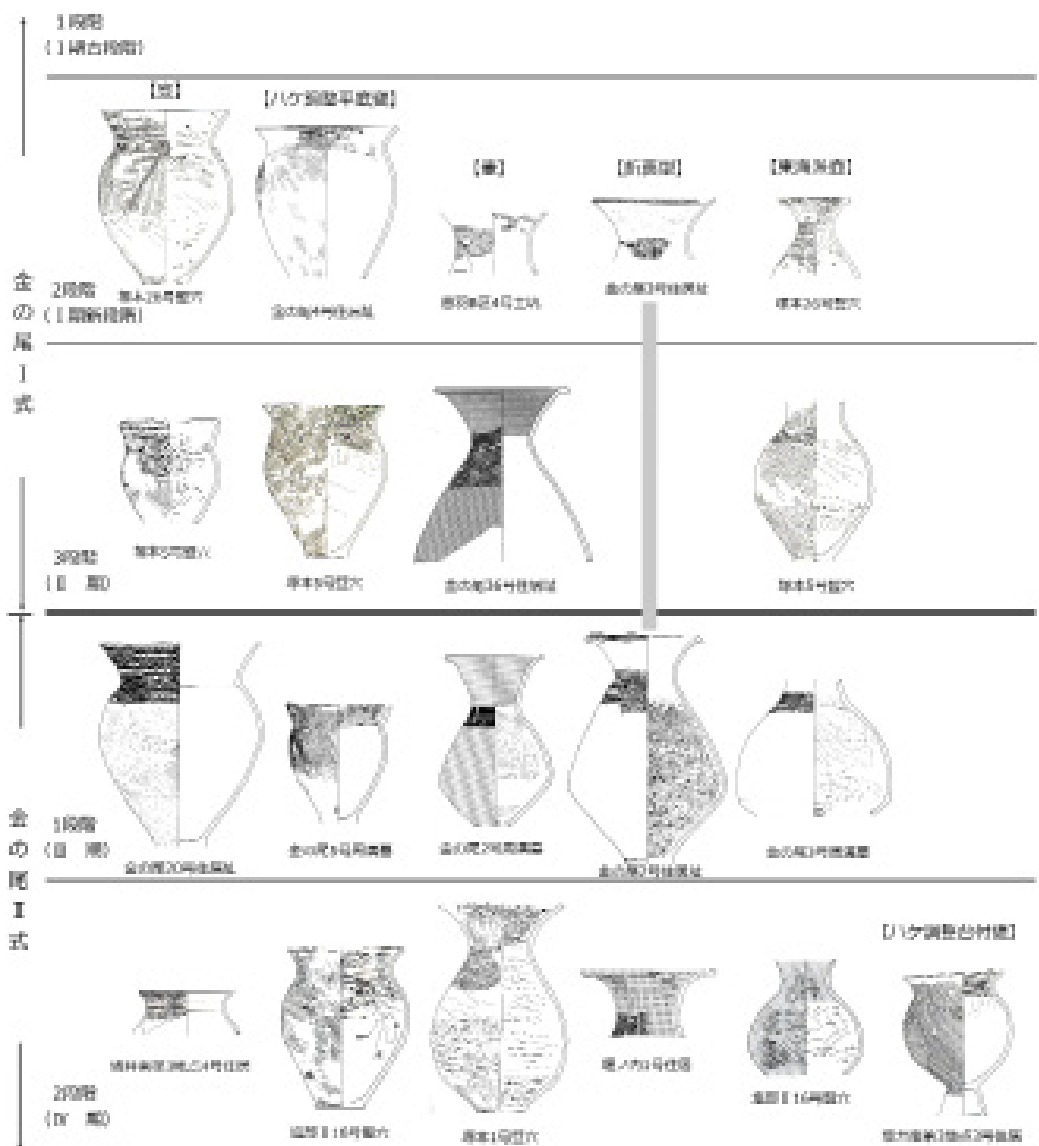


図1 金の尾式土器の基本組成

S-1:12

箱清水式土器とはやや異なる変化をしていると認められる。徐々に類似性が低くなっていく箱清水式土器という現象からは、土器づくりの情報が甲府盆地の北側の地域（長野県方面）からの影響が少なくなっていくことが、数を増す東海系土器の存在からは、甲府盆地南側の地域（静岡県方面）からの影響が強くなっていくことが読み取れる。

つまり、こうした金の尾式土器の変化は、時期による他地域からの影響の変化が反映されていると捉えることができる。

岩村田式土器と金の尾式土器との比較

岩村田式土器は、前述したように、頸部に鋭利な金属のような工具によって施文されたヘラ描文が施される壺と、櫛描横羽状文を胴部に施す甕が存在することを特徴とする。後期前葉ないし中葉から古墳時代初頭まで存続することも特徴である（小山2020）。

岩村田式土器と金の尾式土器の中部高地系土器を比較すると、頸部に鋭利な工具でヘラ描文が施文された壺と、胴部に櫛描文が施された甕が存在するという点で共通点が見出せる。甲府市塚本遺跡、音

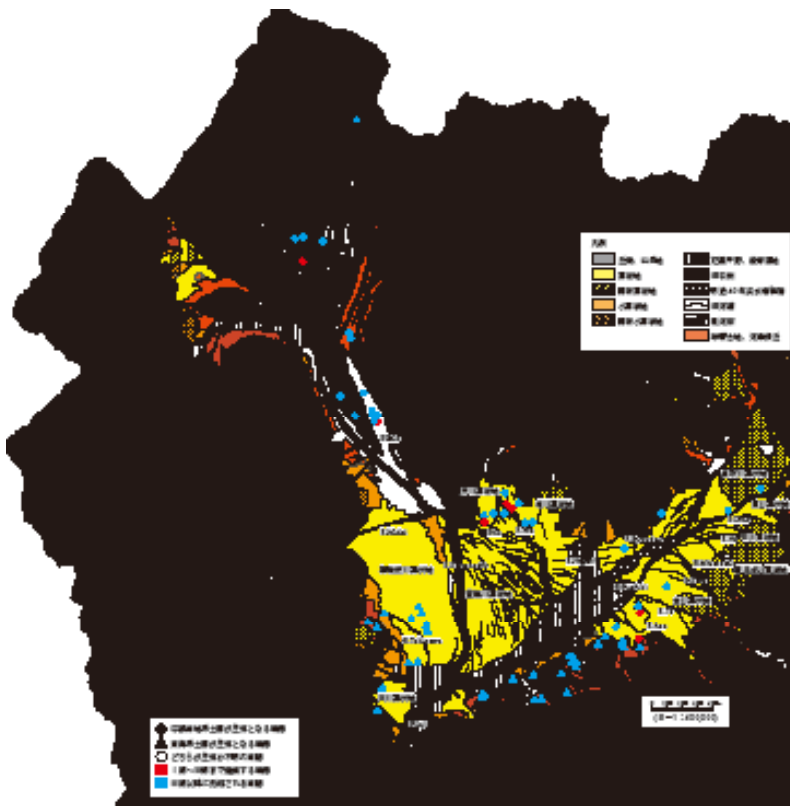


図2 甲府盆地の遺跡分布

ける受容段階での文様形態の未検証という課題を残している。しかしながら、箱清水式土器の地域差は従来から指摘されてきたことであり（例えば笹沢 1986 など）、その差が具体的に整理されてきたということは、複数地域に由来する土器が混在する甲府盆地の弥生時代後期を考えていくうえで大きなプラスになる。すなわち、これまで甲府盆地において大枠で中部高地系とされていた土器群と共通性の高い土器群が分布する地域が明確になれば、より踏み込んだ比較（分析）も可能となっていくのである。

羽遺跡で確認されたヘラ描文が施された壺は、確かに茅野市家下遺跡で確認されたヘラ描文とは施文工具が異なっており、共通性を指摘できる（小山 2017）。しかし、異なる点も存在する。

甕の胴部文様について、岩村田式土器は櫛描横羽状文を施すが、金の尾式土器では単一パターンではなく、縦羽状、斜状、鋸歯状区画に波状文充填など、いくつかのバリエーションがある。また、金の尾式土器の甕には文様を施さず、ハケ調整のみで仕上げるハケ調整甕が存在するという特徴もある。小山岳夫は金の尾式土器のバリエーション豊富な胴部文様について、甲府盆地および茅野地域では、「岩村田式土器が変容して独自展開した結果」としての豊富なバリエーションを想定しているが（小山 2017）、甲府盆地ではその前段階、後期初頭の資料が現在確認されていないため、検証することができない。

こうしたことから、金の尾Ⅰ式期において岩村田式土器の影響は、壺において認められるものの、甕については前段階の資料が発見されていないため、後期初頭での比較の欠落、それによる甲府盆地にお

甲府盆地の遺跡分布

最後に甲府盆地での遺跡分布とその特徴について提示し、議論進展のための一つの材料としたい。

図2と図3は、山梨県が作成した5万分の1の地形分類図を国土交通省のGIS ホームページからダウンロードして、必要な地形情報をトレースし、40万分の1に縮小して作成した遺跡分布図である。

遺跡が形成された土地の地形は、その遺跡周辺で行われた生業活動に適した環境を有していたと推定できる。このため遺跡立地が類似する遺跡同士では、類似した生業活動と開発戦略をもって地域開発を行ったと仮定することが可能と考える。つまり、遺跡間の比較において遺跡立地の地形環境は有益な情報になると考えられる。これが本図を用いて遺跡分布を示す理由である。しかし本図で示されている情報は、あくまで現在の地形情報であるため、当時の状況と直結して考えることはできない。これは高橋学が指摘するとおりであり（高橋 2003）、この図が有する欠点でもある。

しかしながら、中・近世、近・現代の資料で確認

できる地形環境変化や発掘調査で確認できる埋没地形等を参考にすることにより、ある程度の補正は可能であると考えられる。

以上のことから、現在の地形情報と過去の地形情報を直結させた比較はできないという欠点を有するものの、地形環境変化を示す後世の資料や埋没地形等の情報によりある程度の補正は可能であることから、この図を使用して遺跡分布とその特徴について提示する。

まず遺跡分布の時期的変化という視点で図2と図3を比較すると、Ⅰ・Ⅱ期で遺跡が分布していなかった地域にもⅢ・Ⅳ期では遺跡が分布するようになっていること、Ⅰ・Ⅱ期よりもⅢ・Ⅳ期のほうが、遺跡数が増加していること、Ⅲ・Ⅳ期では、扇状地扇端部や丘陵上といった立地の遺跡が増加していることが確認できる。

Ⅲ・Ⅳ期に遺跡が分布する地域は、甲府盆地の西部と東南部の地域であり、この地域の遺跡から発見される土器は東海系土器が主体的である。中部高地系が主体的に出土する遺跡を●、東海系土器が主体的に出土する遺跡を▲で表示すると、Ⅲ期以降の甲府盆地内では、中部高地系土器が主体的に出土する遺跡と東海系土器が主体的に出土する遺跡が、盆地のほぼ南北に分かれて分布している状況が確認できる。

先ほど、土器の時期的変化を確認し、類似性が低くなっていく箱清水式土器と、数を増す東海系土器の存在から、時期が下るにしたがって、甲府盆地の北側の地域（長野県方面）からの影響よりも南側の地域（静岡県方面）からの影響が強くなっていくことを示したが、分布する遺跡数の変化からも、Ⅰ・Ⅱ期では北側の地域（長野県方面）からの影響が強く、Ⅲ・Ⅳ期では、南側の地域（静岡県方面）からの影響が強くなっていくという甲府盆地の状況が読み取れる。

遺跡が立地する場の地形環境という視点でこの図をみると、Ⅰ・Ⅱ期の遺跡立地は、河川に近接した立地が多いことがわかる。これらの遺跡の多くは河川の氾濫によって形成された微高地上に立地していることが確認されており、旧河道や後背湿地を利用した生産地の設定が推定できる。Ⅲ・Ⅳ期では、こうした河川の氾濫によって形成された微高地上という立地に加え、扇状地扇端部や丘陵上に位置する

遺跡も出現し、増加する。こうした遺跡立地の変化は環境変化も含め、生業形態の変化とリンクしている可能性がある。

遺跡立地が類似する遺跡同士では、類似した生業活動と開発戦略をもって地域開発を行ったという仮説が成り立つならば、こうした遺跡立地の共通性は、出土する土器の類似性という項目と併せて集団の移住を論じるうえで一つの指標になると考えられる。もちろん、人類による地形環境への適応の結果、たまたま類似した地形環境へ居住しただけという可能性もある。

遺跡立地の地形環境と、そこから推定できる土地利用法と出土遺物の共通性、こうしたことを総合的に把握し、比較することは重要であろう。

今後はこうしたことを視野に入れつつ、地域間の比較をモノからコトに至る共通項を整理しながら深めていきたい。

参考文献

- 稲垣自由 2014「中部高地の様相－土器の地域性とその変化－」『西相模考古学研究会記念シンポジウム資料 久ヶ原・弥生町期の現在－相模湾／東京湾の弥生後期の様相－』、西相模考古学研究会、pp.105－118。
- 稲垣自由 2015「甲府盆地における土器の地域性」『考古学リーダー 24 列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』西相模考古学研究会編、六一書房、pp.115－129。
- 小山岳夫 2017「甲府盆地一円と長野県佐久盆地・茅野地域の弥生時代後期の繋がり」『山梨県考古学協会誌』第25号、山梨県考古学協会、pp.113－130。
- 小山岳夫 2020「検証「岩村田式土器」－箱清水式土器分布圏内における大中小地域型式の設定－」『専修考古学』第16号、専修考古学会、pp.1－13。
- 小池岳史 2001「諏訪地方湖南地域の後期弥生土器－茅野市家下遺跡の甕形土器からみた箱清水式土器文化圏の小地域と地域差－」『長野県考古学協会誌』93・94、長野県考古学会、pp.60－80。
- 笹沢 浩 1986「箱清水式土器の文化圏と小地域－地域文化圏の動静を語る－」『月刊 歴史手帖』14巻2号、名著出版、pp.37－45。
- 高橋学 2003『平野の環境考古学』、古今書院、p.314。
- 中山誠二 1999「弥生時代の編年」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）、山梨県、pp.404－413。

「家下・金の尾型」と「岩村田式」

小池岳史

「家下・金の尾型」と呼ばれる土器

諏訪盆地南部、茅野市域（以下、諏訪湖南）の後期弥生土器は、未発見の初頭と末葉を除き、一貫して断絶型（中部高地型）の櫛描波状文を施文する。

頸部に簾状文をもち、波状文、縦羽状の条線文等を施文する甕、頸部に横線文と丁字文、ヘラ描きの矢羽状文等をもつ壺があり、赤塗の高杯と鉢が伴う。先学の指摘どおり、佐久盆地の「箱清水式」と深いつながりが認められる。

一方、諏訪盆地北部（以下、諏訪湖北）以北で出現した可能性がある、頸部に簾状文をもたず、3～5条程度の断絶型波状文を上下が重なるように施文する「波状文甕」をはじめ、「箱清水式」が静岡県及び神奈川県に分布する土器と接触し、山梨県甲府盆地北西部（以下、甲府盆地）で成立したと考えられるハケメを意図的に残す「ハケ調整平底甕」、口縁端部を折り返す又は巻き込んで仕上げる「折り返し口縁壺」など、佐久盆地に見られない土器群の存在が浮き彫りとなり、純粋な「箱清水式」でないこともわかってきた（小池1999、2001、2010）。

こうした複雑な様相を示す土器群が、甲州街道（現国道20号）沿いに甲府盆地まで拡がり、「箱清水式」分布圏の南端を形成する。長野県茅野市の家下遺跡、山梨県甲斐市の金の尾遺跡からまとまって出土したことに因み、「家下・金の尾型」と命名された（青木2000）。

本稿では波状文甕の出現の背景を探り、これまでと違う視点から「家下・金の尾型」の実態に迫ってみたい。その上で、「岩村田式」を携えた諏訪湖南への集団移住について私見を述べることにする。

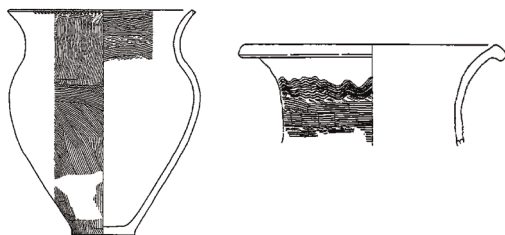


図1 ハケ調整平底甕と折り返し口縁壺（家下）

波状文を施文する2つの甕

波状文甕は後期前葉から見られ、中葉以降に数を増し、「家下・金の尾型」の甕の中核をなす。個体数は多くないが、「座光寺原・中島式」と「箱清水式」が接触する諏訪湖北、上伊那北部、松本平南部（以下、2大土器接触地域）にも分布する。

この2大土器接触地域には、非断絶型（畿内型）又は断絶型の波状文を上下が重ならないよう多段帯状施文する、波状文甕と異なる施文原理をもつ甕が主体的に分布する。

2大土器接触地域で2大土器の折衷様式とされる「橋原式」が成立するが、家下遺跡が発掘されるまで諏訪湖南は「橋原式」の分布域と考えられていた。筆者は「橋原式」で諏訪盆地の後期弥生土器がひと括りできないとした上で、波状文甕の出現を2大土器接触地域に求めたことがある（小池2010）。

「波状文甕」の出現と背景

波状文甕の分布と重なるように中期に分布する「栗林式」の甕は、基本的に波状文甕と同じ施文原理をもつ。そのため、「栗林式」の甕に連なる可能性があるとして、中期末葉から後期前葉まで、切れ目なく文様の連続性と変化が追える松本市の土器群に注目した。

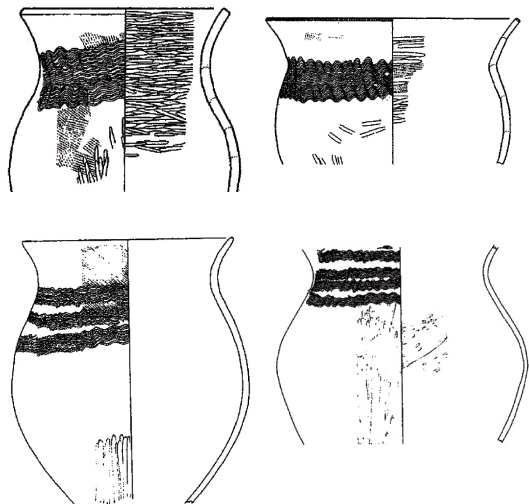


図2 波状文甕（上段：家下）と多段帯状施文の甕（下段：橋原）

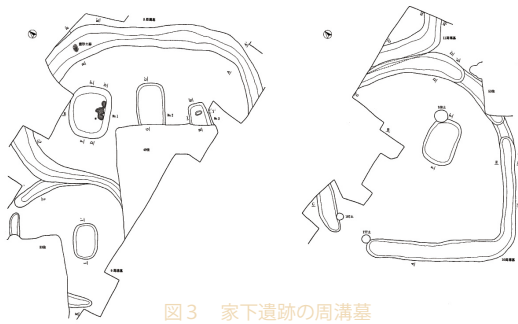


図3 家下遺跡の周溝墓

県町遺跡等の中期末葉に、頸部から胴部下半まで波状文を施文する平底甕がある。しかし、後期初頭の土器がまとまって出土した竹淵遺跡に波状文甕はなく、前葉に入り、竹淵遺跡と出川南遺跡に存在が認められる。文様の連続性は確認できるが、頸部への文様の集約化を説明することができない。

視点を変え、器形に着目すると、竹淵遺跡と出川南遺跡の波状文甕は、口縁部がやや長く外反し、胴部が張り、口径と胴部最大径が同じ、或いは明確に上回る特徴をもち、「栗林式」に連なる後期初頭及び前葉の甕と異なる器形を呈している。

松本平南部の後期は、「栗林式」系譜と異なる多段帯状施文の受容或いは出現があり、甕と壺が視覚的に変化する。背景には天竜川水系からの強い影響が想定されている（直井1999、2001）。

竹淵遺跡の後期前葉に3条の非断絶型の波状文を頸部にもつ多段帯状施文甕がある。文様の施文原理こそ異なるが、頸部を中心に狭い範囲に施文する手法（施文しようとする意識）に共通点が見出せる。加えて、波状文甕の器形の特徴を備えている。

以上から多段帯状施文の受容或いは出現が、波状文甕の出現に関与した可能性を指摘する。2大土器接触地域に出現した波状文甕が後期前葉に諏訪湖南に流入し、甲府盆地へ南下したと考える。

諏訪湖南からみた「岩村田式」集団の移住

近年、小山岳夫は、後期前葉に「岩村田式」を携えた集団が諏訪湖南へ移住したことを指摘した（小山2017ほか）。土器をはじめ竪穴住居、炉と多面的に論じており説得力がある。

筆者は「斜状文甕」「矢羽状文壺」の移入と独自展開、長方形竪穴住居の受容を論拠とする諏訪湖南への集団移住に異存はなく、更に故地の土器と波状文甕を携え、南へ下った可能性もあるとみる。

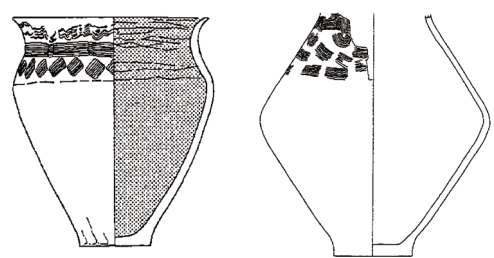


図4 短線文をもつ甕と壺（左：下横屋、右：後田第2）

波状文甕の出現の背景は先述の通りで、諏訪湖南における後期前葉の土器様相を、「「岩村田式」集団が携えて移入した斜状文甕と矢羽状文壺の独自展開に加え、諏訪湖の北から波状文甕、甲府盆地から折り返し口縁壺が流入し、それぞれ定着する。」と説明したい。複雑な土器様相の背後にある集団関係が、小山が指摘した竪穴住居と炉の多様性に表れている。

小山は周溝墓に触れていないが、家下遺跡から後期中葉以降の不整円形周溝墓と方形周溝墓が見つかる。現状では、諏訪湖南の不整円形周溝墓の受容は、甲府盆地より1段階以上遅れており、土器・竪穴住居と連動しない。甲府盆地に伝わった不整円形周溝墓が、後期中葉以降、方形周溝墓と共に北上し、家下遺跡にもたらされた可能性もある。

今後に向けての課題

松本平南部の後期初頭に、多段帯状施文と共に短線文が出現する。この文様が、「家下・金の尾型」分布圏にも散見される。破片での出土が多いが、山梨県韮崎市上横屋・下横屋・後田第2遺跡では短線文をもち、多段帯状施文する完形に近い甕と壺が出土し、遺存率が高い点が注目される。

韮崎市は佐久盆地及び諏訪湖南から甲府盆地へ向かうルート上にあり、交通の要衝である。この地域をターゲットに、2大土器接触地域に分布する土器が、諏訪湖南を飛び越し流入したかの印象を受ける。「岩村田式」が南下し、諏訪湖南と甲府盆地の交流がはじまる後期前葉の韮崎に生じたこの現象の解釈については今後の課題である。

これまで、天竜川水系由来の土器群にあまり注意を払わず「家下・金の尾型」の地域色や独自性を考えてきたが、本稿を機に視野を広げ、さらなる実態解明に努めたい。

引用・参考文献は省略しました。

登呂式土器にみる中部高地系土器の影響

篠原和大

はじめに

弥生後期に駿河湾西部地域の静岡・清水平野では壺に赤彩と櫛描文を採用する登呂式土器が成立する。同じ頃中部高地の土器と関係して関東地方に形成される樽式土器、岩鼻式土器、朝光原式土器といった櫛描文土器と登呂式土器が大きく異なるのは、甕形土器が全く櫛描文を採用しない太平洋岸に通有のハケ調整台付甕であることである。

信州方面から静岡・清水平野へは甲府盆地を經由して富士川中流から興津川水系に入り峠を越えて静岡清水平野の東部の庵原地域へ到達するルートがある（図1）。つまり、静岡清水平野は他の中部太平洋岸地域の中でも、ある程度独立して中部高地地域との交渉が可能な地域であった。登呂式土器はこの静岡清水平野に限定される狭い地域に形成された土器であった。登呂式土器にみる中部高地の影響とはどのようなものであったのか。

1. 弥生中期以前の中部高地との交渉

中期中葉までの交渉 駿河湾西部地域の富士川水系を介した中部高地方面との交渉は、弥生時代の当初から認められる。旧富士川町山王遺跡や清水市天王山遺跡では榎王式や水神平式とともに浮線文系土器が検出される。信州系の土器は雲母を多く含むものが多く、堆積岩主体の砂を混入する静岡清水平野で作られる土器とは分けられる場合が多い。中期前葉丸子式に伴う一部の土器や中期中葉の平沢式系統の土器にも雲母を含むものが多く甲府盆地や信州方面で製作されたものである可能性が考えられる。

有東式土器と栗林式系文様構成の壺 中期後半には栗林式土器の成立によって、それを明確にとらえることが可能になってくる。川合遺跡2号方形周溝墓（IV-3期）では、搬入品と考えられる栗林式の壺のほか、模倣品と考えられる壺も多く、中部高地系の甕・鉢・高坏などが出土している。中期後半の新しい段階（IV-4、5）になると、搬入品として中部高地系の甕形土器は認められるが、壺形土器のそれとわかるものは目立たなくなる。一方、IV期中頃の中部高地系の壺の伝統を引くとみられる壺形土器は文

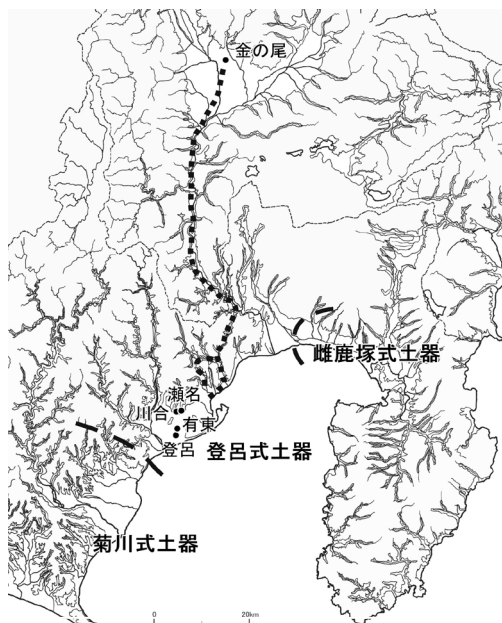


図1 中部高地からのルートと弥生後期前半の土器分布

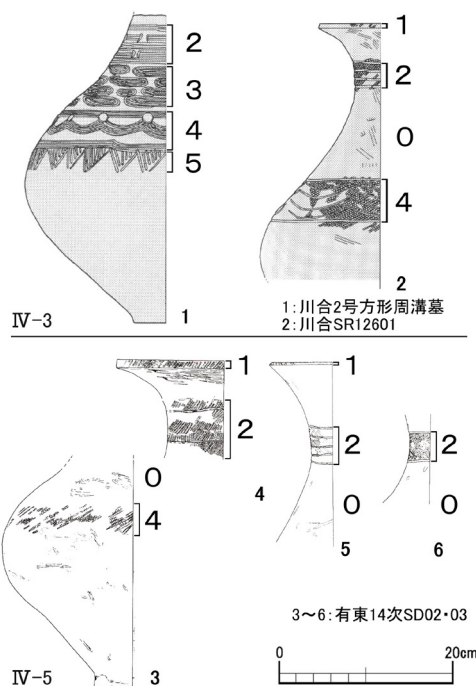


図2 有東式土器の栗林式系文様

様施文の後退を見せながらも定着していく。

栗林式土器の壺の文様構成はⅠ～Ⅴの文様帯（青木 2001 ほか）もしくは1～5の裝飾帯（石川 2002）で説明されており、その構成の変化が示され

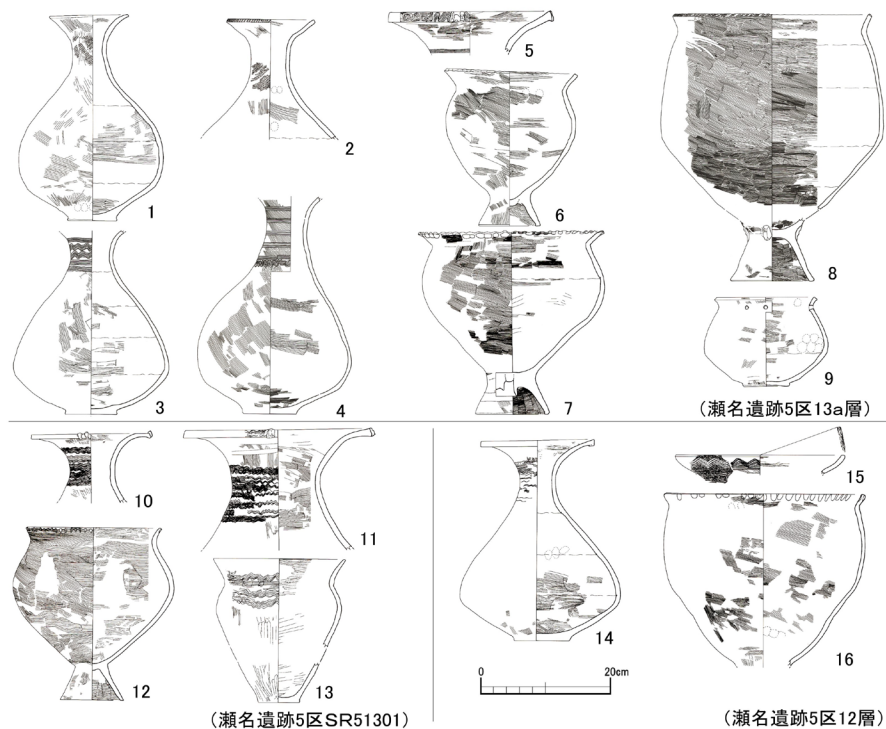


図3 登呂式土器の形成過程（上段：1期、下段：2a期）

ている。静岡・清水平野でもこうした栗林式の文様構成で理解される土器を抽出すると（図2、装飾帯区分は石川 2002 に倣った）、IV-3期には各構成の土器がみられ、IV-4、IV-5期にかけて、2装飾帯および4装飾帯で構成される文様を持つ壺が増加する。各装飾帯は縄文を地として沈線で区画したり横走沈線を加えるものや縄文のみのものが主で、こうした土器が次第に増加し、特にIV-5期では、縄文地に沈線を加えた2装飾帯のみで文様を構成する土器が盛行するとみられることは注目される。

2. 登呂式土器の形成と中部高地系土器

登呂式土器 登呂式土器は静岡市登呂遺跡出土土器を指標に設定されてきたものであるが（杉原 1949 他）、その内容は必ずしも明確に把握されてきたものではなかった。それというのも、登呂遺跡出土土器には一定量の菊川式（系）土器が含まれており、純粋な登呂式土器を把握するには、登呂遺跡出土土器から菊川式土器をのぞく「引き算」が必要であった。その結果認識される弥生後期の登呂式土器は、静岡清水平野を中心とした狭い範囲に成立する土器であって、壺の櫛描文と赤彩を特徴とする土器群である（篠原 2006a・b）。一方、静岡平野北部の瀬名遺跡、川合遺跡などでは後期前半に菊川式系土器が

少ないようであり、純粋な登呂式土器の姿をつかみやすい。

登呂式土器の形成 登呂式土器の成立に関して、私はそのもっとも古い段階の資料として瀬名遺跡5区13a層出土土器に着目してきた。細頸の広口壺は、頸部に施文するもの

みからなり、

縄文のみを施文するもの（図3-1, 2）、櫛描直線文やそれに櫛描波状文を加えた文様加わっている（3～5）。先の栗林式土器の文様構成に対比するなら2装飾帯のみが残されたものと言え、IV-5期からの「縄文地に沈線を加えた2装飾帯のみで文様を構成する土器」の装飾帯の位置を引き継ぎながら、沈線がなくなり、櫛描文が用いられるようになることに特徴があると言える。他に広口の鉢（9）がある。甕はすべて台付甕と考えられるが（6～8）、胴部内面に横位方向のハケが卓越し、口唇面に押圧や刻みを加えるなど、菊川式土器の甕とは異なり、登呂式土器の甕に通有の特徴を持つ。これらの土器群と登呂遺跡で同様の特徴を持つ土器を登呂式土器の1期とした（篠原 2006a）。この上層の瀬名遺跡5区SR51301、同区12層や6区18層では、壺は口縁が大きく開く広口壺になり（10, 11, 14）、口縁部は折り返さずに単純口縁になるものが多い。文様はやはり頸部の2装飾帯の位置に櫛描波状文や直線文が安定して用いられるようになる。甕は内外面を連続的に横位から斜位のハケで調整する登呂式土器の台付甕と中部高地系の甕が伴っている。これらの土器は登呂式土器の2a期としたもので、以上の資料は登呂式土器の形成過程を層位的に示すものでもある（篠原 2006a）。

登呂型文様の形成と文様に見る中部高地の影響 登呂式土器の壺の文様の成立過程については、その施文手法に着目して説明することが可能である(図4、篠原 2006a)。有東式土器の終末頃の壺の文様には、先の説明のように頸部に縄文を施して、数条の沈線を加えるもの(1)や沈線で区画するもの(2)、少量だが櫛描波状文に沈線を加えるもの(3)もある。先述のようにこれらは栗林式土器の2装飾帯を引き継いだ文様と考えられる。登呂式土器の縄文のみの文様a1(6)は、有東式土器の文様の沈線が脱落し、地文の縄文が残されたものと理解できる。一方、縄文に櫛描直線文を加える文様a2(4)は、沈線が櫛描直線文に置き換えられたものと考えられ、c2(5)は沈線に置き換えられた櫛描直線文のみが施文されて地文が省略されたものと考えることができる。縄文の上下を櫛描直線文で区画するものa3(7)も有東式の区画の沈線(2)が櫛描直線文に置き換えられたものと理解される。一方、この関係は、登呂式土器の文様の櫛描波状文と櫛描直線文の関係にもあてはまる。複帯構成の櫛描波状文のみからなる文様b1(9)は地文だけが施された文様であり、文様b2(10)の櫛描波状文の間に配される櫛描直線文や文様b3(8)の櫛描波状文の区画として配される櫛描直線文は、有東式の文様の沈線文と同じ位置にあると理解できる。こうした登呂型文様は登呂式土器の1期に定着し、ほぼすべての土器の文様がこの登呂型文様として理解できるが、櫛描直線文が付加されるa2、a3、b2、b3、c2は1期、2期の比較的古い段階を中心に認められ、次第に地文の縄文のみ(a1)

や櫛描波状文のみ(b1)の文様が主体となっていく。このように、登呂式土器の壺形土器のほぼすべての文様は、有東式文様の栗林式2装飾帯を引き継ぐ文様の沈線が省略されるか櫛描直線文に置き換わったものとして理解され、地文として縄文に加え櫛描波状文が定着する。このような文様群を登呂型文様と呼んでおいた(篠原前掲)。この登呂型文様の形成は、中部高地における栗林式から箱清水式への壺形土器の施文原理の変化として「主文様が沈線文から櫛描文に転換すること」(青木 2001)、また、栗林式から吉田式への変化が文様構成が頸部の文様(2および2b装飾帯)に収斂すること(青木同上、石川 2002)とも対応している。また、有東式土器ではさらに多様な文様構成の壺が存在しているのに対し、登呂式土器ではこの登呂型文様のみに統一され、同時に赤彩が盛行することは登呂式土器全体が中部高地の土器系統に強く傾斜したものと考えてよいと思われる。一方、登呂式土器の壺の櫛描波状文と直線文の組み合わせからなる櫛描文の構成は、今のところ中部高地のどの地域ともかなり違った特徴を有しており、独自の文様形成をするといえる。後期への転換における櫛描文の受容はむしろ自立的な文様形成の手段として取り入れられているといえる。

登呂式土器の構成と中部高地系土器の影響 登呂式土器の壺形土器は、登呂型文様を採用する広口壺のほか、無文の短頸広口壺、無頸壺などがありこれらも赤彩される。登呂遺跡では大型壺が散見されるが、これも中部高地の影響といえるかもしれない。一方、甕は、台付甕形土器であり、中部高地型櫛描文の平底甕は採用されない。中期後半以来、中部高地型の甕の搬入は続くが、在来の甕形土器がほとんど影響を受けないのも変わらない。登呂遺跡では土器の高坏は極めて少量で木製高坏が補完しているものと考えられる。

中部太平洋岸地域における登呂式土器(図5) 登呂式土器は、ほぼ静岡・清水平野に限定される狭い範囲に弥生後期に成立する土器である。西側の地域に分布する菊川式土器は中期白岩式土器の伝統を引く土器で、壺の文様構成、形式構成、台付甕形土器の調整手法、鏝状口縁の高坏形土器を含む器種組成など、登呂式土器とは全く異なっており、登呂遺跡でもそれはつくり分けられている。一方、富士川河口域を隔てて東側に分布する雌鹿塚式土器は、壺の文様は頸部の一帯の装飾帯からなるが、短い原体の

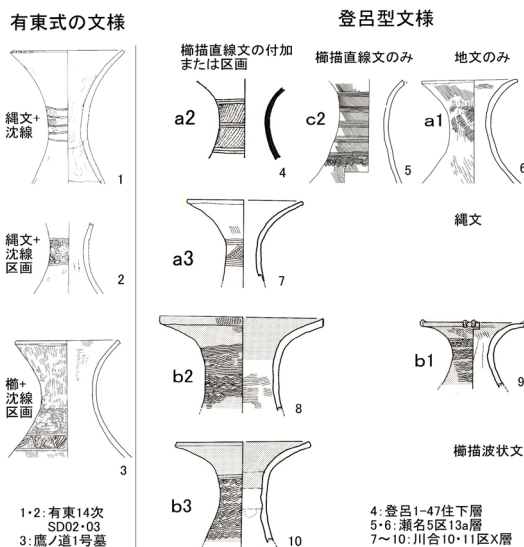


図4 登呂型文様の形成(篠原 2006a 図9を改変)

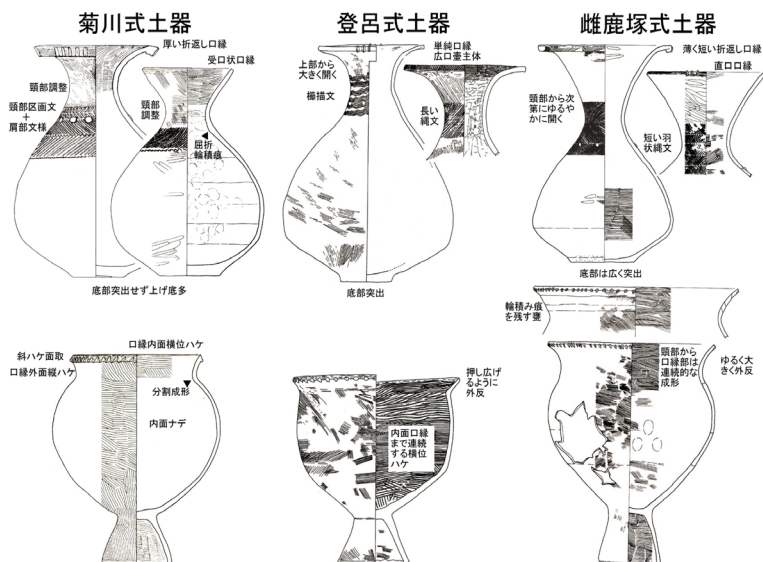


図5 菊川式・登呂式・雌鹿塚式の比較（篠原 2006b より転載）

羽状縄文からなり、甕に輪積手法が用いられる点も含めて、南関東の宮ノ台式土器の伝統を引く土器との関連が考えられる。また、静岡清水平野での雌鹿塚式土器の出土は稀有である。

このような諸点から考えても、中部太平洋岸地域でも後期の土器の形成に中部高地地域の土器の影響が考えられるのは独り登呂式土器の特徴といえる。

3. まとめ 登呂式土器に見る中部高地系土器の影響

静岡・清水平野における弥生後期・登呂式土器形成の背景に中部高地からの強い影響があったと説明した。

①登呂型文様とした、中部高地の中期から後期への変化と同調し、施文原理を同じくして櫛描文を採用する壺の装飾と赤彩が盛行する。

②登呂型文様は中部高地もしくはその一部の地域の文様スタイルを直接採用したものではない。また、登呂式土器の形式構成は、一部の器種は中部高地の影響を受けた可能性があるが、台付甕を採用するなど中部太平洋岸地域に共通する内容を持っている。

③登呂式土器はまた、その西側に分布する菊川式土器、東側に分布する雌鹿塚式土器とも異なる型式内容を持っており、その分布圏はほぼ静岡・清水平野に限定される。この時期中部高地系土器として甕形土器が静岡清水・平野に搬入される。

登呂式土器は、有東式土器からの伝統、中部高地の土器の影響、中部太平洋岸地域の土器との同調という三つの側面を型式内容や形式構成などの異なる

側面に表示しながらその独自の様相を保っていた。中部高地系土器そのものの移入は、甕形土器を中心に一定量認められるのみであり、集団的移住のような状況は考えにくい。小山岳氏は、静岡・清水平野に搬入される中部高地系の甕形土器は金の尾式であると指摘し、交渉の目的は交易であったとした（小山 2020）。

画期となる後期初頭は、静岡清水平野では登呂遺跡の形成とともに広大な水田が拓かれたように、平野全体

でも開発が飛躍的に進んだ時期であり、その背後には鉄製工具の普及が考えられる。その主要な入ルートは日本海側から中部高地を経たルートであった可能性は高く、東海東部の太平洋岸では静岡・清水平野がその窓口になったと考えられる。にわかに中部高地との関係を強めつつ、周辺地域との関係をも自立的に取り持っていく状況を登呂式土器の形成期の様相と重ね合わせることも可能であるように思われる。

新型コロナウイルスの影響で身の状況が一変したこともあり、編集の小山氏には多大なご迷惑をおかけしました。心よりお詫び申し上げます。

引用・参考文献

- 青木一男 2001「中部高地型櫛描文の施文原理と地域性」『長野県考古学会誌』93・94
 - 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100
 - 小山岳夫 2020「検証「岩田村式」土器」『専修考古学』16号
 - 篠原和大 2006a「登呂式土器の成立と展開－静岡清水平野後期前半期弥生土器の編年の考察－」『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書（自然科学分析・総括編）』
 - 篠原和大 2006b「登呂式土器と雌鹿塚式土器－駿河湾周辺地域における弥生時代後期の地域色に関する予察－」『静岡県考古学研究』38
 - 篠原和大 2010「駿河地域の中部高地系土器と有東式土器・登呂式土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』山梨県考古学会
 - 佐藤由紀男・萩野谷正宏・篠原和大 2002「遠江・駿河」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- ※一部報告書は割愛した

神奈川県西部 足柄平野の中部高地系櫛描文土器

大島慎一

1 はじめに

神奈川県西部域において中部高地系櫛描文が出土することは既によく知られている（立花 2010 ほか）。ほとんどが破片資料ということもあって、いまだ詳細を解明する段階には至っていないものの、その一角に位置する足柄平野においても、中部高地系の櫛描文土器が存在することは早くから認識されていた。

杉山博久氏は、千代南原遺跡での発掘調査において少数の破片ながら「樽式的な櫛描文をもつ甕形土器」が出土していることに注目し、横浜市域に分布することが知られていた朝光寺原式との関連性について言及している（杉山 1972）。それ以降、神奈川県西部地域では資料の蓄積が徐々に進んでいる状況にある。

その後立花実氏によって神奈川県西部の中部高地系（なお同氏は「中部高地型」と呼んでいる）櫛描文土器の集成が行われるとともに、共伴性の高い良好な資料を分析し、その編年的な位置が後期初頭に位置づけられること、またそれらと金の尾遺跡資料との関連性に着目し、中部高地からのルートとして山梨県を介在する可能性を指摘するなど、多くの新

しい見解を示している（立花前掲論文）。

この報告から 10 年が経過したが、足柄平野においても若干の資料の増加をみたものの、当時の見解を大きく塗り替えるような知見は現在のところ得られていないと言ってよい。近年では小山岳夫氏も、神奈川県西部地域での様相に注目している（小山 2019）。こうした点も踏まえ、いくつか気付いたことについて書きとめておきたい。

2 足柄平野の状況

まず、足柄平野における出土状況について少し丁寧にみていく。足柄平野における弥生時代遺跡の分布には一定の傾向が認められる。中期中葉の中里期を境に、それ以前の前期末から中期前半にかけては平野北部の丘陵上に遺跡の主な分布が認められるのに対し、中期後半から後期末～古墳時代初頭にかけは現在の小田原市域となる海岸部も含めた平野南部の低台地や低地に遺跡の分布が集中ようになる。

このうち、立花氏の集成による中部高地系櫛描文土器が出土した小田原市内の遺跡は 8 遺跡（大字単位）とされているが、これは現状においてもほぼ



足柄平野出土の中部高地系櫛描文土器

1 香沼屋敷遺跡第Ⅵ地点 2 千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点 6 号溝 3 千代吉添遺跡第Ⅰ地点 1 号溝 4 千代光海端遺跡 5 千代光海端遺跡 3 号方形周溝墓 6 千代南原遺跡第Ⅷ地点試掘トレンチ 7 千代南原遺跡第ⅩⅤ地点 1 号溝

図 1 足柄平野出土の中部高地系櫛描文土器

変わらない。とりわけ千代（小田原市No. 75）遺跡内での出土調査地点は17地点にも及び、中でも千代台地南西部分に位置する千代南原遺跡に顕著である。この機会に立花氏の集成以降に刊行された報告書を改めて点検してみたが、その多くは千代南原遺跡内の第ⅩⅩⅠ（21）～ⅩⅩⅣ（24）地点において（渡辺ほか 2012、2013）、他に千代仲ノ町遺跡第Ⅹ地点（山口ほか 2017）、穴部山神堂遺跡第Ⅰ地点（戸田ほか 2015b）、高田南原遺跡第Ⅲ地点（山口ほか 2020）で他時期の遺構などから出土している。

3 まとめにかえて

このように見ると、これは立花氏も指摘していることだが、小田原市内に限らず神奈川県西部全体を見渡しても、千代遺跡群での出土例が際立って多いことは、それらが破片資料であるとしても改めて注意されよう。

なお出土状況について、後期前半の集落遺跡であるにもかかわらず、中部高地系の櫛描文土器が確認されなかった例がいくつか認められた点にも触れておきたい。愛宕山遺跡第Ⅱ地点（小池ほか 2010）、酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点（小池ほか 2013）、中里遺跡（戸田ほか 2015）、天神山遺跡第Ⅲ地点（戸田ほか 2016）がそれである。酒匂北川端遺跡のように中部高地系とみられる平底甕が出土した例はあるが、これらの遺跡では少なくとも図示できるような資料は確認されなかったようである。私自身は小田原市の文化財整理室での出土土器の接合作業などを見てきた印象から、後期の遺跡ならば必ず中部高地系が含まれるくらいに思っていたのだが、千代に集中することも含め、分布に濃淡がみられることについてもう少し丁寧に見ていかなければいけないと改めて認識したところである。

このほか、いくつか気付いた点について。まず器種については立花氏の指摘同様、壺は極めて希で、ほとんどが甕と思われる。また、今回は取り扱わなかったが、金の尾遺跡にも存在する、やや腰高な刷毛調整平底甕も注意が必要であろう。相模地域の甕は基本的には刷毛調整台付甕であり、腰高な刷毛調整平底甕は中部高地系櫛描文土器が分布する神奈川県西部においてのみ認められるからである。ただその一方で神奈川県西部地域は、駿河湾沿岸の登呂式のように、土器型式の成立に中部高地系櫛描文が

影響を及ぼしている（篠原 2010）というほどではないように思える。小山氏が指摘するように、小型の甕の移動に着目し、山梨県方面との交流の反映ととらえるべきであろうか（小山前掲論文）。この影響のあり方の違いも今後検討していくべき課題であろう。最後になったが、足柄平野で出土している中部高地系櫛描文土器のいくつかを掲載しておこうと思う。このうち千代光海端遺跡（杉山ほか 1984）の資料は決して大きなものではないが、小山岳夫氏が実査に際し金の尾式の搬入品と言ってもよいと指摘した資料である。以上、ずいぶん雑駁な印象論になってしまったが、今後も検討を深めていきたいと考えている。なお、小山岳夫氏の文献は本誌掲載の小山論文で確認していただきたい。

引用参考文献

- 杉山博久 1972 『小田原市千代南原遺跡発掘調査報告書』
諏訪問順ほか 1998 「小田原城下香沼屋敷遺跡第Ⅵ地点」『平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書』1999 『千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点』2006a 「千代南原547番1号外における試掘調査」『平成15年度試掘調査（1）』2006b 『千代吉添遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点』
山口剛志ほか 2017 『千代仲ノ町遺跡第Ⅹ地点』2020 『高田南原遺跡第Ⅲ地点』
渡辺千尋ほか 2012 『千代南原遺跡第ⅩⅩⅢ地点』2013 『千代南原遺跡第ⅩⅩⅠ・ⅩⅩⅡ・ⅩⅩⅣ地点』小田原市文化財調査報告書第5・66・69・135・137・180・192・162・164集
（以上 小田原市教育委員会刊行）
小池聡ほか 2007 『神奈川県小田原市千代南原遺跡第ⅩⅡ地点』2008 『神奈川県小田原市千代南原遺跡第ⅩⅤ地点ⅩⅨ地点』2010 『神奈川県小田原市愛宕山遺跡第Ⅱ地点』2013 『神奈川県小田原市酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点』盤古堂
佐々木竜郎ほか 2016 『天神山遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』
戸田哲也ほか 2015a 『中里遺跡発掘調査報告書』2015b 『穴部山神堂遺跡第Ⅰ地点 久野北窪山遺跡第Ⅰ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
篠原和大 2010 「駿河地域の中部高地系土器と有東式土器・登呂式土器」立花実 2010 「神奈川県西部地域における弥生時代後期の土器様相と中部高地型櫛描文土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散 資料集』山梨県考古学協会
杉山博久ほか 1984 「千代光海端遺跡」『西相模における古式土師器の研究（資料編Ⅰ）』小田原考古学会
引用参考文献は図示資料の出典のほか主要なものに限らせていただいた。

岩村田式と金の尾式移動の意味

小山岳夫

1 はじめに

1 点目 弥生後期前葉に岩村田式土器が佐久盆地から甲府盆地と諏訪湖南部へ移動した自論の可否を本特集に寄稿された見解を参考にして検証する。

金の尾式は甲府盆地で中部高地型櫛描文が施文される土器（以下「中央高地系土器」とする。）と東海系（東遠江か）土器とが接触して在地的変容を遂げて成立した土器で中山誠二が提唱した。

甲府盆地～諏訪湖南部の後期弥生土器を括る名称の金の尾・家下型は10年前に青木一男が提唱し、今回小池岳史が継承している。

2 点目 静岡・神奈川県で出土する中央高地系土器は型式内容を示す器種が揃わず、主に甕に限られる。他型式の中に特定器種が点在する意味を、太平洋沿岸駿河・相模からの寄稿を参考にして考える。

2 岩村田式復活の経緯

佐久盆地の弥生後期土器のうち壺・高坏・鉢は鮮烈な赤色で彩られる。1936（昭和11）年藤森栄一はこれらを岩村田式と呼び、信濃の弥生土器では2番目に新しい段階に位置づけた。1966年神村透に箱清水式と同一視されたため、岩村田式は学史から姿を消したが、昭和の時代に佐久の発掘に従事した諸先輩はこの名を愛し、後進に伝え続けた。

学史退場から54年、筆者は長野県立歴史館所蔵の1930年岩村田駅近く出土の神津猛資料を観察した。この資料は藤森が岩村田式設定に使用したと考えられ、壺のへう描矢羽状文、甕の櫛描横羽状文など、近年筆者が仮称した佐久系箱清水式と同一の内容であった。これらに佐久盆地を象徴する小地域型式名を与えるのが適当と考えた結果、先行論文で岩村田式の復活を提起した（小山 2020）。

3 甲府・諏訪湖南へ 岩村田式の移動

筆者は、主に長野盆地よりも文様帯幅の広いへう描矢羽状文壺（図2-7）に加え、頸部の櫛描波状文帯上下を沈線で区画する壺（2-10）、受口口縁が形骸化した甕（2-9）が甲府・茅野で出土した（2

-8・5・1）との類似を根拠に佐久盆地から甲府盆地・諏訪湖南への岩村田式移動を主張するが移動先の研究者はどう見るのか。

稲垣は矢羽状文の壺の共通性は同一工具であることから一部認めるものの、金の尾式の甕の櫛描文様は縦羽状・斜状・鋸歯状区画に波状文充填などバラエティがあり、佐久の横羽状文とは異なるとする。稲垣が引用した拙稿（小山 2017）は金の尾Ⅰ式2段階に絞って比較しており、これと併行する佐久の小山Ⅱ期では横羽状文は成立しておらず、次のⅢ期古で成立する。ただし、この論文では甕の分析が甘く鋸歯状文（小山 2017では山形文）は甲府・茅野の独自文様と指摘するに留まった。佐久盆地では斜状文や少数派ではあるが縦羽状文が存在することなど、甲府盆地の甕との共通性を記載しなかったことは反省点である。

小池は矢羽状文壺と斜状文甕の類似に加え、長方形竪穴住居の存在や佐久固有の土器敷炉から岩村田式の諏訪湖南への移動に肯定的であるが、諏訪湖南にみられる頸部に3～5条多段に施文される波状文甕は諏訪湖北・松本盆地南部・上伊那盆地など南北の折衷土器分布域（以下「折衷域」）からの影響下にあること、やはり折衷域からの影響とする短線文の壺・甕など、諏訪湖南の岩村田式・東海系プラス折衷域の土器の存在に注意を払う。

石川日出志は金の尾式を長野県北信・東信系とし、慎重姿勢である（石川 2017）。

岩村田式移動の正否の判定には、稲垣が指摘する甲府・諏訪湖南で欠落する後期初頭段階からの鋸歯状区画などの文様の系譜、小池が言う折衷域の混在など多面的な検討が必要である。とは言え、佐久盆地は長野盆地よりも甲府・諏訪湖南に近く、本号に執筆陣の検証により岩村田式移動の可能性は、一歩前進したと考えている。

4 駿河・相模湾沿岸へ 金の尾式土器の移動

駿河では静岡清水平野、相模では足柄平野小田原市では本誌で大島慎一がまとめた遺跡や大磯町

時期		佐久盆地北部		長野盆地	
弥生前期	小山Ⅰ期			青木1層	
	小山Ⅱ期			青木2層	
弥生中期	小山Ⅲ期			青木3層	
	小山Ⅳ期			青木4層	
弥生後期	小山Ⅴ期			青木5層	
	小山Ⅵ期			青木6層	
古墳前期	小山Ⅶ期			青木7層	
	小山Ⅷ期			青木8層	
古墳前期	小山Ⅸ期			青木9層	
	小山Ⅹ期			青木10層	
古墳前期	小山Ⅺ期			青木11層	
	小山Ⅻ期			青木12層	

図1 岩村田式（佐久盆地北部）と箱清水式（長野盆地南部）の後期弥生土器対比

馬場台遺跡など足柄平野一帯で中央高地系土器が出土している。これらは主に甕で、大形品はなく中小形品主体である。胎土は薄暗灰色が多くきらきらと光る雲母を含む点で共通する。明橙色で堆積岩主

体の黒・灰色の岩石を含む地元の土器とは一瞥でも見分けられる（図2-①～④）。

筆者は駿河・相模湾沿岸地域に点在する中央高地系土器は、金の尾・塚本遺跡の土器観察の結果、雲



図2 雲母含む土器 ①山梨県塚本 5 住、②③神奈川県馬場台 17 住 ④静岡県瀬名流路 SR5 ①⑥⑧甲府市教育委員会蔵 ②③大磯町郷土資料館蔵 ④⑪静岡県埋蔵文化財センター蔵 ⑤茅野市教育委員会蔵 ⑦長野県立歴史観蔵 ⑨⑩佐久市教育委員会蔵



図3 ⑤茅野市家下 ⑥甲府市塚本 5 住 ⑦神津猛資料佐久市岩村田駅付近 ⑧甲府市音羽 5 土坑
⑨佐久市北西の久保 70 住 ⑩同 77 住 ⑪中部高地型櫛描文を用いた静岡県瀬名流路 (SR51301)

母が含まれることから甲府盆地からの搬入品と考えている。因みに山梨県産の土器は、時代を越えて雲母を含むので、他地域に移動した場合識別が容易である。綿田弘実から、長野県や関東方面などへ移動した甲府盆地の縄文前期中葉・後葉期ⅡⅢ期の土器は、他地域の土器とは雲母を含む胎土の違いからすぐに見分けられると教えられた。

神奈川県西部地域出土の中央高地系土器をまとめた立花実は、これらが後期初頭に位置付けられること、大磯町馬場台遺跡 17 号住出土品 (図 2-②③) が山梨県金の尾遺跡 4・25 号住居址周度土器と共通することから山梨県を介して齎された可能性を示唆した (立花 2010)。今回、大島は小田原市出土の中央高地系土器を再点検し、遺跡によって出土量に偏りがあること、刷毛調整甕の山梨との関連に注目

したが、金の尾式搬入の有無については逡巡している。なお、大島紹介の図 1-1 は移動先では種類の少ない赤彩小形壺であり、やはり携帯用とみられる。

金の尾式の駿河・相模への移動については雲母を含む胎土以外決定的な証拠がないが、地理的条件からみてもその蓋然性は高い。今後、胎土の顕微鏡観察等科学的な分析が必要である。

駿河と相模では中央高地系土器が地元の弥生土器に与えた影響に違いがある。

篠原和夫は静岡清水平野の登呂式は壺の櫛描文と赤彩に甲府盆地を介して中央高地の影響を受けて成立したとする (篠原 2010 篠原論文に記載)。

筆者は、登呂式標識資料の瀬名遺跡の壺 (図 3-⑩) を観察して、この櫛描文が 1 条の波状文が土

器表面を周回せず一定幅で断絶して上下に重ねる中部高地型であることを確認した。施文原理の共通性から篠原の登呂式中央高地由来説を支持する。

いっぽう、足柄平野では東遠江の菊川式、東京湾沿岸の久ヶ原式が混在する様相を呈し、中央高地の影響を受けたと考え得る登呂式のような土器は存在しない。その理由は、弥生中期段階からの中央高地の関与の濃淡に由来すると考える。静岡清水平野では有東式分布圏に榎田型磨製石斧を伴った栗林式の参入が顕著であるのに対し、足柄平野の宮の台式分布圏には筆者が見る限り栗林式の参入は見られない。この違いが両地域固有の後期弥生土器生成段階での中央高地の影響の有無に現れたのではないか。

戦後復興の灯と称され、誰もが知る登呂遺跡の土器が間接的であれ岩村田式と関連する可能性があるとは想像だにしていなかった。感慨ひとしおである。

5 土器移動の意味を遺構も絡めて考える

土器移動と物流との関係性の有無・強弱について、考古学研究者の意見は一致していないが、本稿では森岡秀人の論文(森岡 1993)を参考にして考える。

佐久から甲府・諏訪南部への移動仮説が正しければ、森岡の土器移動の諸類型では移動距離 70 km なので大地域間移動、壺・甕・高坏・鉢などすべての器種や石で囲う構造の炉までが移動しているので生活関連システム移動、すなわち生活様式総体の移動の範疇に属し、集団移住と考えて差し支えない。

生活に密着する炉の移動を示唆する事例については、図 4 に山梨県金の尾遺跡の炉の分布状況を示した。調査区の西側は、佐久盆地北部からもたらされたと考えられる土器敷炉・石囲炉、南信や折衷域の埋甕炉など長野県各地の炉が混在している。調査区の東側は、おそらく東海地方由来の普遍的な地床炉だけである(この違いは時期差である可能性が高い)。佐久系・南信系・折衷域の混在状況は、諏訪湖南でも同様に確認できる。後期前葉における甲府盆地・諏訪湖南における来歴を異にする炉の共存は、土器様相と同じく一集団にとどまらない多系統の集団の移住を示していると考えられる。

炉のあり方と土器様相を重ね合わせると佐久盆地と甲府盆地・諏訪湖南のより強い結びつきが見えてきた。今後も遺構遺物の諸要素を分析し、多角的な視野で状況証拠を積み重ねて金の尾式集団、金の尾・

家下型集団成立に岩村田式集団が関与した蓋然性を高めたい。

一方、甲府から駿河・相模湾沿岸への中小型の甕におおむね限定される土器の移動は、距離自体は 70 ~ 75 km で大地域間移動の範疇にあるが、金の尾式のうち中小型甕の限定器種が登呂・菊川式土器分布圏に飛び込んでいることから特定単発器種移動に属し、前者のような生活様式そのものの移動とは一線を画し、別の理由を考えなければならない。

弥生中期中葉の長野県南信地方は特定器種の移動の受容という点で一致するが、基本器種である壺の多くを東遠江嶺田式の壺を補完的に受容した(鈴木 2018)点で異なる。金の尾式の移動は、嶺田式の稲作農耕初期段階の技術援助を目的とした人的交流の結果と異なり、交易に付随した移動と考える。交換物資については、太平洋沿岸の檜材の木器と中央高地の稲束・雑穀束、必需財の交換を想定している。

移動した土器がほぼ中小形の甕に限定される理由は、甲府盆地から太平洋沿岸への途上、キャンプ野営を余儀なくされた際に使用する携帯機能を満たすためであったと考えている。

6 朝光寺原式との関係

朝光寺原式は南武蔵南部の土器型式圏内にありながら、中部高地型櫛描文が描かれる中央高地系土器である。北は多摩川から鶴見川流域までの東京湾西岸内陸部世田谷区と神奈川県川崎・横浜市都筑・緑区などに分布のまとまりがあり、南は帷子川・大岡川など横浜市戸塚区などに小さなまとまりがある。

岩鼻式はやはり中央高地系土器で南武蔵北部の土器型式圏の北西部、埼玉県熊谷市と東松山市の境から入間川までに分布の主体がある。また、南武蔵北部土器分布圏内の荒川右岸の和光市周辺にも小さなまとまりがある。柿沼幹夫はかねてから朝光原式との親縁関係を指摘している。

最近、大木紳一郎は群馬県の甘楽・吉井地域には岩鼻式と共通する樽式甘楽型甕が客体的にみられることを明らかにした(大木 2020)。以上から群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県を跨いで 20km 間隔で飛び石的によく似た特徴をもつ樽式甘楽型・岩鼻式・朝光寺原式が分布することがわかってきた(図 4)。この現象は後期前葉までの時期に特に顕著である。

では、大島慎一が本誌で扱った相模湾足柄平野の

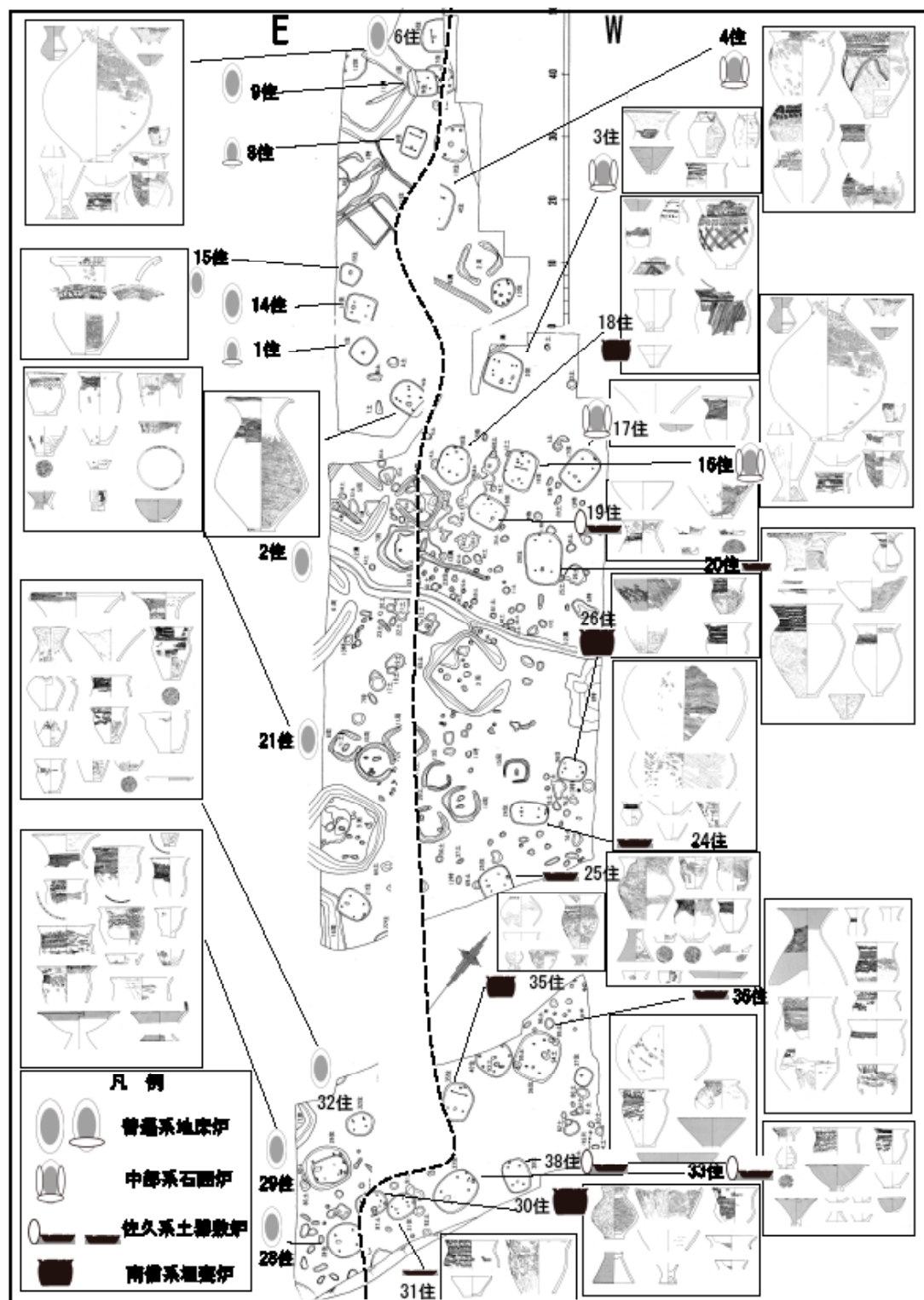


図4 甲斐市金の尾遺跡弥生後期住居の炉の分布状況と出土土器 東西で炉の形態がはっきりと分かれていいる

中央高地系土器と朝光寺原式土器の関係はどうか。両者の分布域は直線距離（小田原市千代から朝光原式の南限横浜市戸塚区までを計測）で約40kmと至近である。筆者はこのことを確認するた

め、2018年12月横浜市立歴史博物館へ赴き朝光寺原式の胎土観察を行った。

その結果、朝光寺原式の胎土には雲母は含まれず、静岡清水平野・足柄平野のように金の尾式との共通

7 赤い土器のクニと当時の社会のイメージ

紀元前栗林式の小形土器への赤彩を嚆矢として壺などの大形品までやたらと赤彩することが流行する千曲川流域を考古学研究者は赤い土器のクニと呼ぶ。弥生後期の当地域を象徴しており、一般も好意的だ。魏志倭人伝には倭人の国は百余国の記載がみられる。クニは小国、これが統合されて国と規定する研究者もいる。但しクニの表現を推し進め過ぎて王国とすることは適当でない。紀元後弥生後期の箱清水・岩村田式の集落・墓制のあり方は栗林式から継続して等質的であり（小山 2020C）、傑出した特定個人の存在を否定しているからである。

8 結語

弥生時代後期前葉の日本列島中央部で比企入間から横浜周辺、佐久から甲府・諏訪湖南への東西2系統の土器移動があった。この移動は生活関連システム移動であり、岩鼻式集団と岩村田式集団の新たな土地の開発目的の集団移動で、後者は長野県中央部の折衷域の土器集団とも協業も想定された。その一因は古気候学や中国の文献記録から推定される弥生中期末紀元前後～後期1世紀第1四半期の気候寒冷化の影響と考える（小橋 2015）。極端な寒冷化を被って中期後半に広大な分布圏を確保していた栗林式・南関東の宮の台式土器の分布域が一挙に縮小、甲府盆地や東京湾西岸などに生じた空白地にへ入植したのが両土器を中心とする集団であった。

馬場伸一郎・遠藤英子の種実痕分析で、両土器の集団はコメとともに雑穀類のアワ・キビを栽培したことが確認されている。雑穀は冷害に強く、コメが全滅しても収穫できる。寒冷期には打って付けの栽培種と技術を携えて新天地開拓にあたったのが岩村田式・岩鼻式土器集団の人々だったのである。

同時期、西相模では西遠江菊川式の移動が始まり、以降後期中葉からは南関東各地への西遠江菊川式と東三河山中式土器の移動が活発になる。

また、北信濃でも後期中葉には鉄剣・ガラス小玉などを伴った丹後半島由来ともみられる北陸系土器の移動が活発になるなど、寒冷化は各地の土器移動を誘発するきっかけを作った。

岩鼻・朝光寺原式など弥生後期前葉の前段階の中期末葉の秩父一帯には栗林式と北島式等の折衷土器下ツ原式があり、青梅市経由で南下して八王子市周辺に受地だいやま式が成立する。これも気候寒冷化に関係すると考えるが、弥生中期の下ツ原式と後期の岩鼻式との関係については別稿で探索したい。

自然要因で移動に至った可能性とともに人間の快楽を求める本能が移動を後押しした可能性も否定できない。最近、人間の脳には移動に喜びを感じる特別な幸福回路があることが Aaron S. Heller の研究でわかってきたのである。

参考文献

- 森岡秀人 1993「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4号
立花実 2010「神奈川県西部地域における弥生時代後期の土器様相と中部高地型櫛描文土器」『中部高地における櫛描文土器の拡散』山梨県考古学協会
柿沼幹夫 2015「北川谷遺跡群編年と岩鼻式・吉ヶ谷式土器との編年対象」『列島東部における弥生社会の変革』西相模考古学研究会
小橋健司 2015「気候変動と房総の弥生社会」『列島東部における弥生社会の変革』西相模考古学研究会
石川日出志 2017「東日本の弥生文化」『山梨考古』第145号
鈴木敏則 2018「三遠南信の文化交流」『静岡県考古学研究』No. 49 静岡県考古学会
大木紳一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』38
小山岳夫 2020A「岩村田式」と「佐久系箱清水式」『信濃考古』No. 193 2020B「検証 岩村田式」『専修考古学』16号（刊行遅れ） 2020C「佐久盆地の周溝墓の変遷」『長野県考古学会誌』160号
Aaron S. Heller 2020.5.18 nature neuroscience

編集後記

岩村田式の南下を考えるきっかけは2015年9月1日尖石考古館に弥生土器の調査に赴いた際の小池岳史さんの一言でした。「山梨県に矢羽状文壺がある。」この一言に触発されて、山梨県、静岡県、神奈川県を行脚しました。太平洋沿岸の駿河・相模で対面した中央高地系壺のキラキラ雲母の輝きは今も脳裏に鮮明に残っています。私の仮説はまだ完全に証明されてませんが、正しければ、岩村田出身の弥生人の後裔は海を見たということになります。（小山岳夫）